

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

グローバル・キャリア・デザイン1

2022年度夏季

第31回ファースト・ステップ・

プログラムオンライン

(2022 8/26～9/6)

全体報告書

In フィンランド ケニア ベトナム シンガポール

オーストラリア ザンビア モザンビーク アメリカ

(研修順)



目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第 31 回 FSP オンラインについて..... | 2 |
| ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは..... | 3 |
| 第 31 回 FSP オンライン概要..... | 3 |
| 研修内容..... | 3 |
| 研修日程..... | 4 |
| 参加メンバー紹介..... | 5 |
| グループ活動概要..... | 9 |
| 事前学習..... | 10 |
| 事前授業..... | 11 |
| オンライン交流会..... | 12 |
| 全体学習会..... | 12 |
| 協定大学報告書..... | 13 |
| 御講話報告書..... | 22 |
| 事後学習..... | 36 |
| 振り返りミーティング..... | 34 |
| 事後授業..... | 36 |
| 終わりに..... | 37 |
| 謝辞..... | 37 |
| 編集後記..... | 37 |

第 31 回 FSP オンラインについて

ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは

第 31 回 FSP オンライン概要

研修内容

研修日程

参加メンバー紹介

グループ活動概要

ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは

グローバル・キャリア・デザイン (通称：ファースト・ステップ・プログラム) は、春休みまたは夏休みに実施される、2週間程度の海外研修プログラムです。海外協定校等の教育機関での授業体験や学生交流、グローバルに事業を展開する企業や法人、国際機関等の海外拠点での実務家の講義、グローバルに活躍する社会人との対話、および関連プロジェクトや施設の視察を行います。参加者は1プログラムにつき20名前後です。プログラム参加を通して、学生の皆さんがグローバルなキャリアについて視野を広げ、自身のキャリア形成に活かすこと、そして、将来的に、「グローバル」にも「日本」でも、自身のキャリアを活かす「グローバル」な人材として育っていくことを目指します。(1北大生のための留学ガイドより抜粋)

第31回 FSP オンライン概要

研修期間：2021年8月26日(金)～9月6日(火)

研修先：フィンランド共和国、ケニア共和国、ベトナム社会主義共和国、インドネシア共和国、オーストラリア連邦、ザンビア共和国、モザンビーク共和国、アメリカ合衆国(研修順)

参加人数：27名

費用：無料(ただし、オンライン授業受講ための通信費用は学生の負担)

研修内容

協定大学での研修

協定大学との交流では英語で行われる授業に参加し、授業内のテーマに関して話し合いました。協定大学の学生とはお互いの大学や国に関してプレゼンテーションを行った後、近況や文化の違いなどについて意見交換をしました。

企業や法人、国際機関などで活躍されている方による御講話

世界各地でグローバルに活躍されている方々の現在のお仕事の内容やこれまでのキャリアについての話題を中心に御講話を拝聴しました。積極的に質問を重ね、海外で働く方々の^{なま}生の考えに触れることでFSP受講生(以下FSP生)の今後の指針へヒントをいただける貴重なきっかけとなりました。

¹ https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/

研修日程

| 日付 | 日本時間 | 研修都市 | 研修内容 |
|----------|-------------|-------------------|---|
| 8/26 Fri | 16:00~17:30 | ヘルシンキ (フィンランド) | MUJI Finland Oy 高木美穂様による御講話 |
| /29 Mon | 10:00~11:30 | ナイロビ (ケニア) | シロアムの園 公文和子様による御講話 |
| /30 Tue | 11:00~13:00 | ホーチミン (ベトナム) | International University - Vietnam National University HCMC 学生交流 |
| /31 Wed | 15:00~19:30 | ボゴール (インドネシア) | IPB University - Institut Pertanian Bogor 授業受講・学生交流 |
| 9/1 Thu | 13:30~16:30 | パース (オーストラリア) | Curtin University 授業受講・学生交流 |
| /2 Fri | 16:00~18:30 | ルサカ (ザンビア) | University of Zambia 授業受講・学生交流 |
| /5 Mon | 18:30~20:00 | マプト (モザンビーク) | 国際連合児童基金 (UNICEF) 渋谷朋子様による御講話 |
| /6 Tue | 10:00~11:30 | ベセスダ (アメリカ) | 米国国立衛生研究所 (NIH) 向山洋介様による御講話 |

参加メンバー紹介

第31回FSPオンラインでは、リーダー1名、サブリーダー2名が立候補により選出されました。リーダー、サブリーダーは、全グループリーダー及び科目担当教職員スタッフ・支援員・先輩ボランティアと連携、協力して、プログラム全体をまとめました。

グループリーダーは、グループメンバーそれぞれに目を配り、各グループの中心となってグループ活動を進めました。リーダー・サブリーダーとは、海外研修前から後にかけてプログラム全体のまとめ役、全グループリーダーとの連携と協力、スケジュール管理、科目担当者や事務スタッフ・支援員との連携を行います。支援員、先輩ボランティアの皆様は過去にFSPに参加された先輩方で、御自身の経験をもとにグループ活動が円滑に進むようサポートをしてくださいました。

以下、FSP生と支援員・ボランティアの皆様を紹介します。

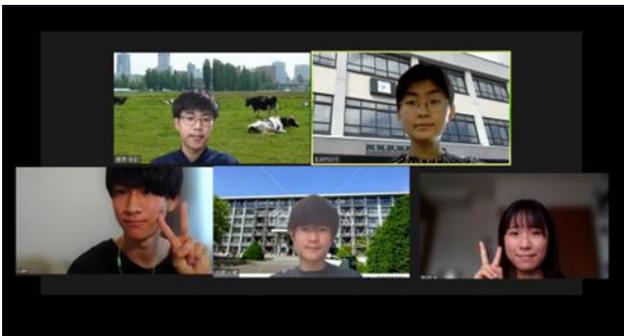
役職の略称

〈リ〉 → リーダー 〈サブ〉 → サブリーダー

〈グ〉 → グループリーダー

〈グループ1〉

- ・プレゼンテーション
- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・報告書作成
- ・御礼状作成



(左上から時計回り、以下同様)

笹記 僚真 (農学部1年)

北村 ちひろ (文学部1年) 〈グ〉

増田 陽乃里 (文学部1年)

前原 大輝 (総合理系1年)

瀬戸 真斗 (法学部1年) 〈リ〉

〈グループ2〉

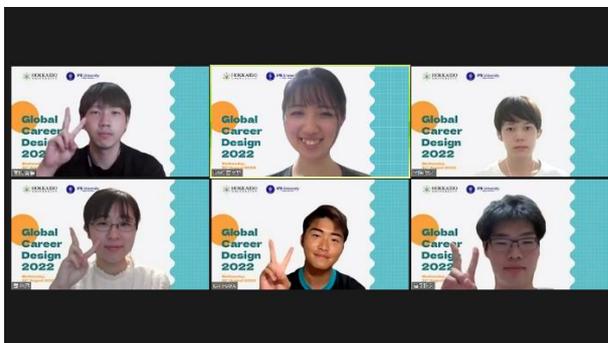
- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・企業等調査、報告
- ・報告書作成
- ・各交流会の企画、運営
- ・協定大学調査、報告
- ・御礼状作成



岩本 康佑 (法学部 2年)
森 大晟 (経済学部 2年)
伊丹 萌華 (水産学部 1年) 〈グ〉
谷口 眞隆 (法学部 1年)
檜木 遥 (水産学部 1年)
伊藤 詩歩 (薬学部 1年)

〈グループ3〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・協定大学調査、報告
- ・御礼状作成
- ・企業等調査、報告
- ・報告書作成
- ・報告書編集、仕上げ



倉島 直也 (経済学部 2年)
百々瀬 あかり (法学部 1年) 〈サブ〉
鈴木 太陽 (総合理系 1年)
福元 政文 (文学部 1年) 〈サブ〉
伊原 快 (経済学部 1年) 〈グ〉
渡辺 茜 (総合理系 1年)

〈グループ4〉

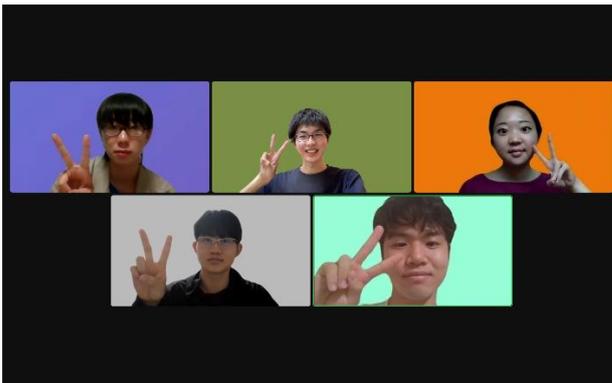
- ・ 全体学習会の企画、運営
- ・ 企業等調査、報告
- ・ 報告書作成
- ・ 国及び都市に係る調査、報告
- ・ 協定大学調査、報告
- ・ 御礼状作成



能代 匠(総合理系1年)
大西 晃(文学部1年) 〈グ〉
大町 結愛(水産学部2年)
大瀬 唯華(医学部1年)
鈴木 天音(農学部2年)

〈グループ5〉

- ・ 成果報告会発表
- ・ 企業等調査、報告
- ・ 報告書作成
- ・ 国及び都市に係る調査、報告
- ・ 協定大学調査、報告



成川 航斗(文学部1年)
羽鳥 健太郎(総合理系1年) 〈グ〉
中西 萌希(水産学部1年)
中村 健太(工学部1年)
古屋 芳恭(水産学部2年)

〈支援員・先輩ボランティア〉



松原 康稀 支援員
法学部 3年
全体管理・グループ 1
第 28 回 FSP オンライン



倉橋 康平 支援員
水産学部 3年
全体管理・グループ 5
第 30 回 FSP オンライン



広瀬 健 支援員
理学部 3年
グループ 2, 3
第 28 回 FSP オンライン



逢坂 はるの 支援員
理学院修士 2年
グループ 1, 5
第 24 回 FSP 欧州



齋藤 梨乃 支援員
医学部保健学科 3年
全体管理・グループ 5
第 29 回 FSP オンライン



酒井 聡史 支援員
総合化学院修士 2年
グループ 2, 4
第 23 回 FSP アジア



松田 涼花 支援員
経済学部 3年
グループ 2, 4
第 28 回 FSP オンライン



中駄 勇太 支援員
医学部 6年
グループ 3, 4
第 23 回 FSP アジア



神戸 結衣 支援員
農学部 3年
グループ 1, 3
第 29 回 FSP オンライン

また、ボランティアとして以下のお二人をサポートしていただきました。



今井 ゆき菜さん
生命科学院修士2年
第19回 FSP アジア



内林 大志さん
農学院博士1年
第23回 FSP アジア

担当教職員一覧（順不同）

教員の先生方は第31回 FSP オンラインという学びの機会を与えてくださり、スタッフの方々は事務的な面からサポートしてくださいました。

教員

北海道大学 高等教育推進機構 国際教員研究部 国際産学共同協働教育ユニット

講師 川端 千鶴 先生

北海道大学 参与 客員教授 井上 修平 先生

事務スタッフ

北海道大学 学務部 国際交流課 石倉さん、木下さん、谷越さん（9月まで）、綿世さん（10月から）

グループ活動概要

海外オンライン研修の前から後にかけて、グループごとに分担して以下の活動を行いました。

研修でのプレゼンテーション

協定大学研修時における、北海道大学の魅力に関する英語でのプレゼンテーション

研修先についての調査と報告

研修先である国及び都市、協定大学、企業等の調査と全体共有の準備

交流会の企画と運営

現役生同士や現役生と支援員の交流を深めるための交流会の企画と運営

全体学習会の企画と運営

研修先の調査結果を共有するための全体学習会の企画と運営

研修当日に向けたその他の準備

御講話者様から与えられた事前課題の準備や協定大学学生交流のセッティング

御礼状作成

全研修先への御礼状の作成

報告書作成

研修先での学びや発見をまとめた報告書の作成

成果報告会でのプレゼンテーション

第31回FSPオンラインを通して得た学びをまとめたプレゼンテーション

広報

成果報告会をFSP未参加者にも周知させるための広報

事前学習

事前授業

全体学習会

不定期開催のミーティング

事前授業

事前授業は、6月下旬から8月中旬にかけて計3回、対面で行われました。

第1回事前授業：6月22日（水）

まず担当教員である井上先生、川端先生、そして運営担当の皆様が紹介され、その後FSP生同士で自己紹介を行いました。自己紹介は挙手制であり、FSPにおける積極性の重要性を体感しました。そして、授業の概要や受講にかかる事項に関して川端先生からの御説明があり、FSP生に期待することとして「自己管理能力、チームで働く力、キャリアプランニング能力の向上」が印象的でした。最後にリーダー・サブリーダーを決定しました。全体的に緊張感があり、FSPへの期待と不安の入り交じった雰囲気でした。

第2回事前授業：8月10日（水）

始めに研修で交流する協定大学に対して行われる英語でのプレゼンテーションが、グループ1の皆さんによって行われました。発表後にはFSP生や支援員、先生方からの積極的なフィードバックがあり、研修本番へ繋がりました。続いて井上先生による、研修で御講話頂く企業・組織の事前調査に関する授業がありました。信頼できる情報源や着眼すべき点など効果的な調査の手法を学ぶことができ、FSP生にとって有意義なものとなりました。最後に川端先生による、「キャリアプランニング」に関する授業がありました。キャリア形成には過去の振り返りと未来への視点や偶発性を活かす姿勢が不可欠である、といった御説明が印象的でした。

第3回事前授業：8月17日（水）

井上先生と川端先生によるキャリア紹介がありました。井上先生からは国際理解について、ご自身のエネルギー業界での経験を踏まえたお話がありました。キャリアプランニングの正解は人の数だけあり、自分は何がしたいのかを考えることが大事だという話が印象に残りました。川端先生からは「キャリアは積み上げていく物だ」というお話がありました。与えられた状況で自分にできることをすればそれがいつか自分の武器になっていく、ということ学びました。どちらもFSP生の今後のキャリア形成にとって貴重なお話でした。

オンライン交流会：7月20日（水）、8月16日（火）

グループ2が主体となり、計2回のオンライン交流会が開催されました。1回目の実施目的はFSP生間の交流を深めることでした。Zoomの背景を自分の話のネタとなるものに設定し、ブレイクアウトルームに分かれて自己紹介を主としたフリートークを行いました。楽しくコミュニケーションをとりながら互いのことを知っていくことができました。

2回目は、過去にFSPを受講された先輩方との交流が目的でした。先輩方と過去の経験などについて少人数でのフリートークをすることでFSP研修への理解を深められました。

全体学習会

グループ4によって開催された全体学習会では、各グループが作成した調査書をもとにマルバツクイズを作成し、問題を出し合いました。クイズ形式をとることでより研修先に興味を持って、解答を考えることで自発的に学ぶことができました。伝えられる情報量は必然的に少なくなりましたが、その後個別で勉強会を開くことに繋がりました。FSPプログラムの序盤でしたが、学習会の用意を通じてミーティングを開く機会が増え、コミュニケーションの機会が増えることでチームワーク強化の助けになりました。

不定期開催のミーティング

第31回FSP生は自発的に不定期開催のミーティングを開きました。ミーティングの目的は事前学習課題を進めることや英語の練習から、研修に対する不安の相談まで多岐にわたりました。誰でもグループを超えた仲間呼び掛けて開催できるこのミーティングは、FSP生間のチームワークを深める一助となりました。

協定大学報告書

International University -

Vietnam National University HCMC での研修

IPB University-Institut Pertanian Bogor での研修

Curtin University での研修

University of Zambia での研修

International University - Vietnam National University HCMC での研修

8月30日(火)、International University - Vietnam National University HCMC (以下IU)との学生交流がありました。IUはベトナムの南部、同国最大都市であるホーチミンに位置する1995年に創立された国立大学です。自然科学や社会科学、経済学、法律学、健康科学など様々な学部・コースを持ち、現在6万人以上の学生が学んでいます。北海道大学とは2010年から協定を結んでいる大学です。

今回のオンライン研修では、はじめに、両大学の代表によるそれぞれの大学の魅力についてのプレゼンテーションが行われました。FSP生がプレゼンテーションをしている間、IUの皆さんが真剣に聴いてくださっている様子を見て嬉しく思いました。IUの紹介では、はじめに日本語で挨拶があったり、IUでBENTOを販売している様子の説明があったりするなど、聴衆である日本人のFSP生に向けた紹介をしてくださって親しみを感じました。聴衆を意識してプレゼンを作成することは、FSP生が最も悩みながら取り組んだことの1つで、その難しさを今でも感じています。以前は何気なく見ていたプレゼンを「作成者の立場になって見る」という新たな視点を得ることができました。

次に、IUの方がベトナムの文化や生活についてのクイズを出してくださいました。クイズの中で最も印象に残ったベトナムの文化は、赤ちゃんに悪い霊が憑かないように「かわいい」と言うことを避けるという文化です。日本ではそのような文化はないと思います。むしろ、日本では「言霊」という言葉があるため、赤ちゃんに悪い言葉をかけるのは避け、「かわいい」などの良い言葉をかけるよう自然と周りから学びます。相反する風習であるにも関わらず、どちらの考え方も納得できたので非常に興味深かったです。

その後、IUの学生1人とFSP生1~3人ほどで構成されたグループに分かれ、ブレイクアウトルームで自由に交流を行いました。お互いの国での学生生活や食事、自分の専攻についてなど多くの話題が出ました。とあるIUの学生からは、「北海道大学に留学したいと考えているが、札幌の物価は高いですか？」と質問をいただきました。自分の住む国や地域について関心を持っていただき、質問していただくのは大変嬉しいことです。しかし、札幌の物価が日本国内の他地域と比較して高いのか、相手の住むベトナムと比較して高いのかはその場で客観的に説明することができませんでした。同じ商品について、1つ何円と紹介すれば分かりやすいと考えましたが、日本円での価格の説明をして伝わるのか、国際通貨であるドルに直したり、ベトナムの通貨ドンに直したりする必要があるのか迷ってしまいました。直す場合のレートや、実際に英語でどう表現するかなどもその場で分からなかったため、結局相手の質問に上手く答えられませんでした。事前に、日本と交流先の国の両方について徹底的に調べ、英語で説明できるように準備する必要があったと感じました。

IUでの学生交流全体を通して、英語の会話能力がまだまだ不足しており、相手の言っている内容が分からない、言いたいことが瞬時に言えないということが多かったと感じました。IUは学生交流の初日であり、オンライン研修で本格的に英語を使ったのは初めてだったので、特に英語面での課題を感じた1日でした。また、オンライン研修先や自分の国・大

学について上手に説明できるほどの知識が不足していたとも感じました。これらの問題は全て事前準備の不足によるものだと思います。短期間で英語能力を劇的に向上させることは難しいですが、会話でよく使われるフレーズを覚えたり、オンライン研修先や日本について話したいことをどのように英語で表現するかを調べておいたりなどの準備はすぐにできます。「瞬時の対応が苦手であれば、事前準備で対応する」ということが今回のオンライン研修で得た学びです。

(文責：前原)



【FSP 生と IU 学生の交流の様子】

IPB University-Institut Pertanian Bogor での研修

8月31日(水)に、IPB University (以下 IPB 大学) と ZOOM を用いたオンライン研修を行いました。IPB 大学はインドネシアのボゴールにある、本学と同様に緑溢れる協定大学です。研修当日はまず始めに、食品科学・食品工学の授業を受講した後、両校それぞれの大学についてプレゼンし、最後に IPB 大学の学生との交流を行いました。

はじめに、Dr. Azis Boing Sittanggang による、グローバル食品科学・食品工学コースの授業を受けました。FSP 生の中には食品科学・食品工学の分野を専門としている人が殆どいなかったため、研修前に授業資料をグループごとに分担して翻訳し読み込むなど、チーム全体で協力し準備を行いました。授業は適宜具体例や図を多く用いて進められたので、楽しく受けることができました。授業全体を通して、食品科学・食品工学がどんなもので、何の役に立つのかを考えました。

今回の授業のメインテーマである食品科学・食品工学とは、科学技術を用いて安全と質の両方を担保することについて研究する分野のことです。特に、世界人口が増加している中、食糧確保が今後必要となることが予想されます。その際、量だけでなく、安全で高品質な食品にするためにも食品科学・食品工学の分野は活躍し、発展していく分野だと思えます。

今回の授業は全て英語で行われたうえに、時折 Dr. Azis 氏が学生を指名して質問なされていたため、FSP 生も英語で発言を求められる場面が多くありました。そのため、FSP 生の中には、英語の授業自体を大まかにしか理解できなかったという人や、英語での受け答えに戸惑う人もいました。このことから研修後の授業内容の共有を徹底させ、より実践的な英語を勉強する必要があるということを感じました。

授業に続く学生交流は、FSP 生 5~6 名に対し、IPB 生 3~4 名の計 5 グループに分かれて行われました。

最初の自己紹介では、フルネームや呼んで欲しい名前、学部、趣味などを紹介し合いました。ファシリテーターである IPB 生は、発言のタイミングがとりづらいオンラインのなか、FSP 生も IPB 生もバランスよく発言ができるように、指名や質問で話しやすい環境を作ってくれました。円滑なコミュニケーションをとるために必要不可欠な、模範となるファシリテーターの姿を IPB 生から学びました。

続く自国紹介では、IPB 生は事前に Power Point を準備してインドネシアの文化、言語、料理、有名な場所を紹介してくれました。対して、FSP 生は自国を紹介できるツールを用意していなかったため、急遽 web サイトから写真を引用するなどして日本の紹介をしました。授業後の振り返りではこの対応について、FSP 生の準備が足りなかったことが反省点としてあげられました。これを受け、日本を紹介するスライドを作成することで、他大学との学生交流への備えを万全にすることができました。

この日のプログラムの最後に、フリートークという形でお互いに関心のあることについて話し、交流を深めました。この交流を通して、IPB 生のリアクションが非常に大きく、

話していて心地よく感じられたことが印象的でした。対面ではもちろんのこと、積極的にリアクションをすることが、オンライン上のコミュニケーションでも欠かせないことを改めて実感させられました。

異文化の方々とコミュニケーションを取ることで、日常生活の中では気づくことのできない難しさをたくさん実感することが出来ました。今回の経験を踏まえて、日本語から英語での脳内変換、相手が伝えたいことを英語で読み解くスキル、ジェスチャーや表情を用いて意思疎通を図ることの重要性を強く実感しました。ここでの学びを今後の社会に出たときにも実践していこうと思いました。

(文責：能代)



【IPB 生と FSP 生の交流の様子】

Curtin University での研修

9月1日(木)に、Curtin University(以下CU)とオンライン研修を行いました。CUはオーストラリアのパースにある総合大学です。アポリジニ学、経済・法学、健康科学、人文学、理工学などの学部を持ち6万人を超える学生がおり、さらにそのうちの1万人以上が留学生です。本学とは2014年に部局間交流協定を結んだのち、2016年には副学長による北海道大学への表敬訪問がなされています。

今回のオンライン研修ではZOOMを用いて最初に北海道大学(北大)の廣吉先生とCUのリチャード先生からの授業を45分ずつ受講したのち、休憩を15分挟んで90分のディスカッションを行いました。FSP生のほかCUを訪問している北大の院生や韓国海洋大学の学生も含めて学生交流を行いました。しかし、残念ながら現地の大半の学生はCUで開催されていた学会に参加していたので、CUの学生の方々との交流はできませんでした。

ここからは講義の内容について具体的に記します。1時間目は廣吉先生(北海道大学教授)、2時間目はリチャード先生(CU Senior lecturer)の授業を受けました。授業では鉱物資源にかかわること、そして鉱業が与える環境への影響について学びました。鉱物資源の種類は極めて多様でその採掘をする際に多様な方法で環境に配慮していることを知りました。また鉱物資源がこれからのカーボンニュートラルな社会をつくるための基盤となっており、消費量が拡大していること、限りある資源を活用するために鉱物資源のリサイクルと都市鉱山の活用がなされていることを知りました。日本は資源の乏しい国であるため膨大な都市鉱山を用いたビジネスや近年発見されつつある日本の排他的経済水域内の資源採取をもっと進めると良いと思いました。

次にCUを訪問中の北大生と韓国海洋大学の学生を含めて学生交流をしました。まずグループ1による北海道大学紹介が行われました。オンライン海外研修3日目ということもあり毎日のようにプレゼンテーションを行っていたため非常に洗練された形で行われました。そのあとリチャード先生によるCUの紹介と、韓国海洋大学の学生から大学紹介が行われました。韓国海洋大学の紹介ではその立地に驚きを感じるとともに海洋大学の学術分野の先進性について知ることができました。プレゼンテーションののち、FSP生は5つのグループごとに分かれて最初に受講した2つの講義についての質問を作成するという課題が与えられました。それぞれグループ間でブレイクアウトルームに分かれた後、各グループで講義や先生自身の経歴に関する質問を複数作成しました。加えてホームに戻って先生に直接、留学生の方々との質疑応答を行いました。最後に川端先生、井上先生からお言葉を頂き、ZOOMでしたが集合写真を撮影しました。日本人同士のグループで英語を意識的に用いて質問を作るのは難しかったのですが、質問を通じて先生方との交流を深めることができました。

今回のオンライン研修ではFSP生は鉱物資源についての知見を得るとともに、CU、韓国海洋大学について、そして先生方の経験談を聞くことができました。具体的には、鉱業が地球環境に与える影響や、それがどういう構造で生じるものなのか、その解決策はどういった

ものなのかといった、普段日常生活で意識することのない内容を知ることができました。また先生方の今までの人生やその多様な経験談を伺う中、FSP生はどのように将来生きていくかについて改めて自分を見つめなおすきっかけを得られました。加えて授業の中でわかりやすく効率的な質問の仕方についてこれまでのオンライン研修の反省を活かしながらさらに良い質問ができるように工夫を凝らすことができました。CUの学生と学生交流こそなかなかなかったものの最後の学生交流の機会であるザンビア大学との交流に向けて一層モチベーションをあげることができました。

(文責：福元)



【先生方とFSP生の交流の様子】

* 赤枠がリチャード先生（1枚目右端）と廣吉先生（2枚目）

University of Zambia での研修

9月2日（金）に University of Zambia（以下ザンビア大学）とのオンライン研修が行われました。ザンビア大学は、創立1965年とザンビアでは最古の大学であるとともに、学部数が13の総合大学です。北海道大学とは獣医学部設立の際に援助したことから関係ができ、現在は大学間交流協定が結ばれています。

まず講義をしていただき、その後に北海道大学の学生、ザンビア大学の学生の順でそれぞれの大学の魅力を紹介するプレゼンテーションと質疑応答を行い、最後に学生交流を行う予定でした。しかし、オンライン研修のデメリットでもある接続不良の問題が起こってしまいました。そこで、Dr. Kaampwe Muzandu の采配の下で講義の前にプレゼンテーションを行いました。

北海道大学の学生のプレゼンの終了後、ザンビア大学の学生から「どのような学部があるのか」「学びたいことに合うような学部があるのか」などのたくさんの質問がありました。質疑応答の時間を通して、ザンビア大学の学生の北海道大学への興味が大きいことを感じました。FSP生で事前に「サークルについてなどの質問が出るのではないかと」考えていたのですが、北海道大学への個人的な興味という視点とは違った学問の視点の質問であったことに驚きました。その後、ザンビア大学の学生のほとんどが北海道大学の学部が農学部、獣医学部、理学部だけだと考えていたことが分かったため、北海道大学での学びの多様性について知ってもらえた機会となり、FSP生一同とても嬉しく感じました。その他にも、時間内にお答えすることができなかつたのですが、FSP生からの注目を集めていたのは「北海道大学内での人種差別の有無」についての質問でした。日本では国内の人種差別問題に対する報道が少なく、その問題について考えることはあっても、どこか他人事のように感じてしまう面が少しでもあったのかもしれません。そのため、FSP生が考えている以上にザンビアの大学生が人種差別について考えていることを知るきっかけに、そしてFSP生それぞれの認識を改めるきっかけにもなりました。

次にザンビア大学の学生のプレゼンテーションが行われました。内容は、ザンビア大学の概要や歴史とともに、多くの蔵書やデータベース、学術雑誌が電子化された e-journal にアクセスすることのできる図書館や、北海道大学と特にかかわりの深い獣医学部についての説明がありました。特に獣医学部のフィールドワークが充実していることから日本とはまた違った視点で学問が学べるということに興味を持った FSP 生も多くいました。

双方のプレゼンテーションの後、学生交流が予定されていきました。今回のザンビア大学との学生交流では FSP 生がファシリテーターを行うことになっていました。FSP 生は、ポゴール農科大学との学生交流で日本文化についてうまく説明できなかったことや、今回がカメラオフでの交流であることから、日本文化を紹介するスライドと共に、自己紹介のスライドを事前に準備しました。しかし、残念なことに接続トラブルがあり学生交流を行うことができませんでした。FSP 生が作成したスライドを披露する機会はありませんでした。

が、FSPにおいて期待されている自己の役割の理解、他者を尊重すること、他者への働きかけという観点でFSP生全員が主体的に動けたことが学びになったと思います。

ザンビア大学との交流の最後は、Mr. Owen Munkombwe の” Entrepreneurship and Small Business という講義でした。ここでは、ザンビアにおける起業家のタイプや起業家精神の歴史、公開有限会社・民間企業・有限会社の3種類の企業組織とそれぞれの利点・欠点について学びました。また、ザンビアと日本の共通点という視点から、IMFから融資を受けたことが挙げられました。融資の後、ザンビアではIMFから民営化を命じられ、雇用されない被雇用者が増え、起業家にならざるをえなくなり、政府が起業家の卵や起業家たちへの援助を行って最終的にヨーロッパをはじめとした世界に進出するという流れが日本と異なることを学びました。このような、国ごとの状況やタイミングにより生じる違いは、とても興味深いものでした。その後のFSP生によるオンラインでの振り返りミーティングでは、Mr. Owen Munkombwe の興味深く分かりやすい授業を聞き、「もっと質問をしたかった」という声が多数寄せられました。

今回、トラブルで学生交流がなくなり、FSP生としてはとても残念でしたが、学生交流が無くなることを伝えられたあと、Zoomを退出していくザンビア大学の学生がいたことから、先方の学生も交流を楽しみにしていたことが感じられて、嬉しさを感じました。このザンビア大学との交流を通して感じたのは、自分たちのことについてより深く知ることの必要性です。北海道大学のプレゼンテーションに対してザンビア大学の学生から学部はどのような形態になっているのか、どのようなことを学べるのかなどの質問がでた際、FSP生が上手く回答できなかったということから、次回以降のFSP生は、日本のこと北海道のことはもちろん、北海道大学の仕組みや学部形態などを説明できるようになっていることを強く薦めます。

(文責：伊丹)



【先生方と UNZA 生と FSP 生の交流の様子】

※赤枠が Mr. Owen Munkombwe

御講話報告書

MUJI Finland Oy 高木美穂様による御講話

シロアムの園 公文和子様による御講話

国際連合児童基金（UNICEF） 渋谷朋子様による御講話

米国国立衛生研究所（NIH） 向山洋介様による御講話

MUJI Finland Oy 高木美穂様による御講話

8月26日（金）に、フィンランドにて Managing Director of MUJI Finland Oy を務められる高木美穂様より、zoom を用いて御講話を頂きました。無印良品が掲げる「役に立つ」という大戦略のもと、高木様の今に繋がる、5つの転機についてお話を頂きました。

高木様から、1つ目の転機として、青年海外協力隊での活動についてお話を頂きました。ピアノ講師をしていた高木様は、漠然と将来を憂いた際に、青年海外協力隊の募集を目にし、以前から海外に興味があったことも重なりドミニカ共和国へと渡りました。現地で、ドミニカ人や同僚の隊員達と接することで、ご自分に「がっかり」してしまったそうです。それは、「自分と人とは違うこと・ドミニカ人だけではなく、日本人に対する自分のコミュニケーション力のなさ・周りが見えておらず勘違いしていたこと」に対してだそうです。しかしながら、この残念な自分が、今の本当の自分だと気づかせてくれたのも、同じく「ドミニカ人や同僚」であり、この事実を受け入れて改善しようとする意識が次のステージに進むときの目標となったようです。FSP 生の多くが、多文化に触れることによって感じた「自分へのがっかり」が、自分の内面を見直すきっかけとなったところに着目しており、そこから、経験することによって新たに気付く自分を受け入れる柔軟性が必要だと学びました。

2つ目の転機は中国での事業拡大のためのプロジェクトメンバーに選ばれたことだそうです。高木様は失敗をさせてもらえる環境の有り難さと失敗を恐れない強さを学んだとおっしゃっていました。高木様の周りの失敗をカバーしてくれる環境のおかげで、失敗しても大丈夫だと気づくことができ、失敗を恐れない「強さ」を身に着けることが出来たそうです。このことは北海道大学という素晴らしい環境に身をおいている私たちに響くメッセージであると感じます。失敗を恐れず、何事にもチャレンジする勇気を高木様からいただきました。

3つ目の転機は高木様が初の女性海外販売代表としてミラノへ駐在した時のことだそうです。ミラノでは会社経営に伴う責任感を知るとともに、自分に素直になることの重要性を身を持って知ったそうです。経理から総務まで全てをこなしていた高木様は大変な時期をお過ごしで、その時に助けてくれたのが周りのイタリア人でした。一人で抱え込んで前に進めず、自分に素直になることがコミュニケーションの扉を明け、次のステージに進む鍵であると教えていただきました。辛い時は辛いと言うなど、自分に素直になることが次に進むための一歩であると再認識させて頂きました。

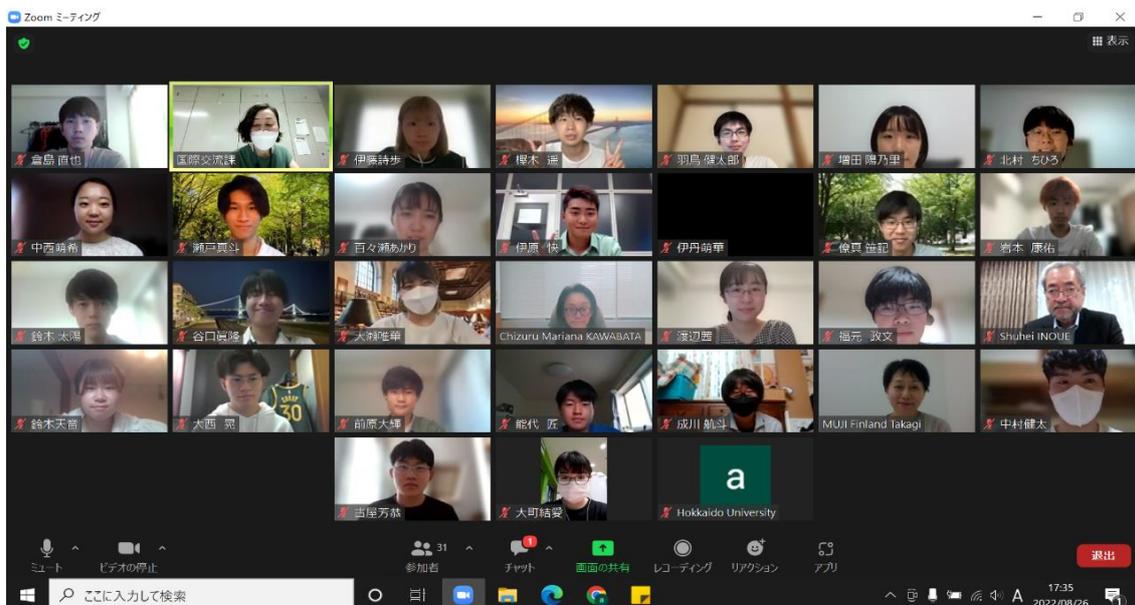
4つ目の転機は、日本に帰国し、東京エリアの営業マネージャーをお勤めになった時でした。当時は、「MUJI を通じて人々の生活の『役に立つ』」「ブランドの進化」「会社を継続させていく為には」の三つの観点から、MUJI の真価と「考える」ことの意味について学ばれたそうです。変わらなければ時代を引っ張っていけないとお思いになり、何を残して何を变えるか、ということをお考えになったそうです。日本社会の時事の流れの速さと情報量の多さに圧倒されながらも、それを組織力で乗り切り、逆に社会をリードすること

を体感したとおっしゃっていました。逆境を乗り越え、それをリードしていこうとお思いになられたというお話から、高木様の強気で前向きな考え方に大変感銘を受けました。

5つ目の転機は、フィンランド事業に携わっている現在だそうです。フィンランドにある無印良品様の店舗は、MUJI Kamppi Helsinki の1店舗のみですが、1000坪もの広大なスペースになっており、MUJI だけでなく、レストランやアートギャラリーなどの施設も含まれています。現在高木様が「学び中」であるのは、ライフバランスだとおっしゃっていました。フィンランドという国、その国民性がアジアと違い過ぎること、サステナビリティとは何か、MUJI はこの国で生き残れるかどうかについて考えていらっしゃるそうです。上記のことから、どれだけ経験を重ねてもまだ「新しい」に出会える自分はラッキーだと感じていらっしゃるそうです。日々の経験を新鮮なものとして捉えていらっしゃる高木様の考え方を、私たち学生も忘れてはならないと感じました。

高木様の御講話を通じて、新しいことに挑戦する重要性を感じ、新しい経験は自己の内面を見直すきっかけを与え、成長する糧となることを学びました。そして、失敗は「強さ」に変わるため、経験に伴うであろう失敗を恐れない精神をも教えてくださいました。特に、FSP 生の多くは、今回のオンライン研修を経て、自分の英語力の低さや、多文化に対する知識の少なさから、自分に「がっかり」を感じました。しかし、高木様の御講義により、自分たちが非力だからこそ、海外交流の時はチームで助け合い、足りていない英語力を補うことが出来ました。また、海外交流の前日には、FSP 生で集まり、研修先の文化や挨拶などを覚え、異文化理解を意欲的にするように努めました。海外交流が進むごとに、自己紹介プレゼンを作るなど、自分たちに足りていないことを受け入れて、改善することができました。これは、高木様の伝えたことが、FSP 生にしっかりと伝わっていることだと考えます。

(文責：伊藤)



【高木様と FSP 生の様子】

* 赤枠が高木様

シロアムの園 公文和子様による御講話

8月29日(月)にシロアムの園の代表である公文和子様に、ケニアよりZoomにて御講話をいただきました。公文様は1994年に北海道大学医学部をご卒業され、小児科医として日本、シエラレオネ、カンボジア、ケニアで勤務されました。2014年にケニアのナイロビでシロアムの園というNGOを設立し、主に障がい児の支援活動をされています。今回の御講話では公文様ご自身のキャリアについて、各国でのご経験を軸にお話してくださいました。

まず公文様は初めに、ご自身がどのように他者と向き合ってきたかについてお話をされました。公文様はご自身が出会った人や事象と自分との関係を考え、常にそれらに「寄り添う人」であろうとされるのだそうです。「寄り添う」とことは、相手のために自分に何ができるかを考えて人に接する、ということです。実際、公文様は日本でも海外でも変わらず、目の前の一人一人に愛をもって寄り添い続けてこられました。このお話から、目の前にある物事に対して自分はどのような姿勢で向き合うべきなのかを考えることが、キャリアを形成する上で非常に重要だということを知りました。

次に公文様は、シエラレオネで経験された考え方の変化についてのお話をされました。公文様はシエラレオネの難民キャンプで、小児科医として子供たち一人一人に寄り添ってご支援をされていました。公文様は始めこそご自身の活動に意義を感じられていたのですが、名も知らないままに子供たちを看取っていくうちに、戦争への怒りと自分の無力さに頭を悩ませるようになったそうです。そのご経験を踏まえて公文様は「頭を悩ませて答えが出せないこともあるが、その時間も無駄ではない」という考え方を持ったことなど、私たちに様々なアドバイスをくださいました。この言葉を聞いて、「公文様はシエラレオネでの辛い期間があったからこそ、今の素晴らしい活動ができているのだろう」という気づきを得ました。

続いて公文様は、ケニアでの悩みや出会いについてお話してくださいました。まずケニアという国について乳児死亡率などをもとにご紹介いただきましたが、公文様が特に強調されていたのは「統計上の数字が改善されれば良いわけではない」ということです。加えて、大きな数字で括られていても個人のニーズはそれぞれ異なるため、支援方法もそれに合わせて考える必要がある、ともおっしゃっていました。この考え方は公文様の「一人一人に寄り添う」という姿勢が何より重要だということをよく表していると感じました。

しかし、公文様ご自身は多種多様なニーズに向き合う中で、自分には何ができるのか再度悩まれたそうです。このような苦慮のなか、公文様は脳性麻痺を抱えるクライド君と出会います。クライド君の素晴らしい笑顔を見て、公文様は恋に落ちたような感動を得たといいます。この出会いによって公文様はケニアでの活動にモチベーションを見出されたそうです。このお話から、様々な挑戦を繰り返すことで、キャリアの転機となるような出会いを得ることができることがあること、また、出会いの大切さを学ぶことができました。

また、ケニアにおける障がい児とその家族の方々の胸が苦しくなるような厳しい生活についてお話がありました。その現状を踏まえた上で、公文様はこれから目指すべき社会の形とは「違いが美しい社会」であるとおっしゃっていました。そのためには、違いが美しいとはどういうことか、ということをお私達もこれから考えていかなければならないのだと強く感じました。

最後に、公文様が2014年にケニアで設立されたシロアムの園について、4つのキーワードを軸にお話していただきました。そのキーワードとは、『出会い』『一人一人が特別な一人』『プロとして働く』『チームワーク』です。中でも、現地で働いているムハンジさんの「子どもたちから多くのものを与えてもらっている」という言葉が印象的でした。ムハンジさんの言葉は、一人一人が特別な一人であり誰もが神様からの賜物を持っているように、障がいのある子どもたちにも大切な役割があるのだ、という相手を大切にする姿勢が強く現れていると感じました。私たちが今後のキャリアを考えていくに当たって、自分の長所を知っておくことはとても大切だと感じます。そのため、今回のお話を受けて自分にある特別な役割や才能を見つけて、これからの生活に活かしていきたいと考えます。

御講話の後には、質疑応答の時間がありました。FSP生からはシロアムの園を運営するにあたっての困難や、ケニアの障がい者サポートなど、公文様の活動に関する質問や、自分自身のキャリアに関する質問があり、公文様の豊富な経験や深いお考えに基づいた回答をいただける貴重な時間であったと感じています。

今回の公文様の御講話を聞いて、私たちFSP生も自分たちに与えられた賜物を自覚していく必要があると感じました。一人一人が自分の強みを持つことでお互いが助け合うこともできます。これは、今後様々な場面で必要となるチームワークにも繋がると考えます。このことを、今後のグループワークをより良いものにするために活かしていきたいです。

(文責：大西)



【公文様と FSP 生】

※赤枠が公文様

国際連合児童基金 - UNICEF モザンビーク事務所 教育プログラムチーフ 渋谷朋子様による御講話

9月5日(月)に国際連合児童基金-United Nations Children's Fund (以下、UNICEF)のモザンビーク事務所において教育チーフを務めていらっしゃる渋谷朋子様より、オンラインにて御講話をいただきました。UNICEFとは、すべての子どもの命と権利を守るため、約190の国と地域で活動している団体であり、個人や企業・団体・各国政府からの募金や任意拠出金によって、保健、栄養、教育などの支援活動を行なっています。渋谷様は日本で英字新聞記者を勤めた後、これまで20年間以上アフリカの教育開発に携わってこられました。

御講話では、渋谷様が現在のお仕事で感じられていることや、過去の経験がキャリア形成にどのように活かされているかを中心に伺うことができました。

まず、渋谷様がお仕事をする時に感じられていることについて、1つ紹介したいと思います。それは、「現場レベル+政策レベル」です。これは、UNICEFでは子どもの教育に対する課題に現場にて直接対応しながら、機関としての政策作りにも参加できるということです。この体制が、UNICEFの強みになっているそうです。例えば、ある村において、農作物の収穫の関係で子どもにどうしても働いてほしいという時期があるという現場の意見を聞き、それに対応するためにUNICEFとして時期に合わせて授業日の調整をするという解決策を見出したということでした。

また、渋谷様が行われているお仕事の話聞くことで、私たち自身の学びへの姿勢について考え直すことができました。御講話の際に、アフリカの子どもたちが教科書を受け取る瞬間にとっても喜んでいて動画を見させていただきました。私たちも動画で見た子どもたちと同じくらいの年齢の時には教科書を貰うと嬉しくなっていました。大学生となった今では、新しい教科書を受け取った時には、少し気が進まないと感じるようになってしまっており、教科書があって、勉強ができることのありがたさを見失っていることに気がつきました。

次に、渋谷様のキャリア形成についての話を紹介します。渋谷様がおっしゃっていたことは「原点や最初に抱いていた目標を忘れず大切にすることが重要」ということです。加えて原点となるような思い出や経験の重要性を語ってくださいました。そのような思い出や経験は渋谷様にとって、何がしたいか分からなくなったり、何をしているか分からなくなったりしたときに、やりがいやモチベーションを与えてくれる存在だとおっしゃいました。実際、渋谷様は英字新聞記者を務めていらっしゃった時に、世界にはこんなにも悲しい出来事があるということに胸を痛められて、そのような悲しい出来事の原因を知りたいと思ったことが海外に出るきっかけになり、今でも大切になさっているということです。渋谷様のように目の前のことにしっかり向き合うことによって、後の人生で自分を支えてくれるような経験ができるのだと感じました。また、FSP生はまだまだ可能性に満ちている白いキャンパスのようだとおっしゃってくださいました。私たちFSP生は全員が現時点でやりたいことがはっきりしているわけではありませんが、だからこそ目の前のことに積極的に取り組んでいこうと感じました。

最後に、FSP 生からの質問に対して、青年海外協力隊についての話も伺うことが出来ました。ある FSP 生は青年海外協力隊の活動地域の言語や安全性について不安を感じていましたが、青年海外協力隊には事前の学習体制が充実していることや現場の情勢に臨機応変に対応しているというお話を伺って、恐れずにぜひ挑戦したいと感じたようです。

このように、実際にグローバルにご活躍されている方のお話を聞くことで FSP 生は、海外で働く方はどのようなことを日々感じていらっしゃるのか、これまでどのような経験を積んで来られたかを知ることができました。渋谷様から伺ったお話をこれからの人生で活かしていけるように、失敗を恐れず様々な経験をしたいと思います。 （文責：笹記）



【渋谷様と FSP 生】

※赤枠が渋谷様

National Institutes of Health 向山洋介様による御講話

9月6日(火)に米国国立衛生研究所—National Institutes of Health(以下 NIH)に勤めていらっしゃる向山洋介様のご講話を Zoom にて拝聴しました。NIH とは 27 の研究機関から成る医学研究所です。NIH では生命システムの性質と行動に関する基本的な知識を求め、その知識を健康増進、寿命の延長、病気や障害の軽減に応用するということを理念とされています。アメリカ合衆国のベセスダに拠点を置き、研究者 6000 人ふくむ約 18000 人のスタッフが働いています。向山様は東京理科大学をご卒業された後、東京大学大学院、カリフォルニア工科大学での研究を経て、現在 NIH において神経と血管の枝分かれ形態形成とパターンニングのメカニズムを解き明かすことを目指しておられます。御講話では、NIH の組織の体制や向山様のキャリアの紹介、基礎研究の面白さなど、学生がグローバル社会でキャリアを形成していく上で重要なことをお聞きしました。

向山様は「一見バラバラの経験(点)が繋がり唯一無二の研究者になること」というスティーブ・ジョブズの有名なフレーズを引用し、ご自身のキャリアについてお話しされました。向山様は、研究者を含め、キャリアの形成には 2 つのやり方があるとおっしゃっていました。1 つ目は 1 つのことや流行の研究に我武者羅に集中して成功すること(専門を突き詰めて競争に勝ち抜く)という方法です。2 つ目はいろいろな研究テーマを経験することで多様な視点を養い、自分しかできないユニークな研究テーマを見つけて成功する方法です。向山様は、自分自身は後者であり多くの人が通る道から外れることで、思考やキャリア形成、人生などの観点でユニークさを生み出すことができるとおっしゃっていました。このお話を伺い、大学の掲示板や本の中に、自分が勉強している分野以外でも興味のあることがあれば挑戦してみようと感じました。

また、御講話の中で、研究者としてのキャリア形成に必要なことを 4 つ伺いました。

まずなによりも重要なのは「よきメンターに出会うこと」です。向山様自身、大学時代に自分のことをきちんとメンタリングやトレーニングしてくれることを考慮して研究室を選んでいたという話をお伺いし、今後、講義やセミナーを通して自分自身と真摯に向き合ってくださいメンターを見つけようと思いました。

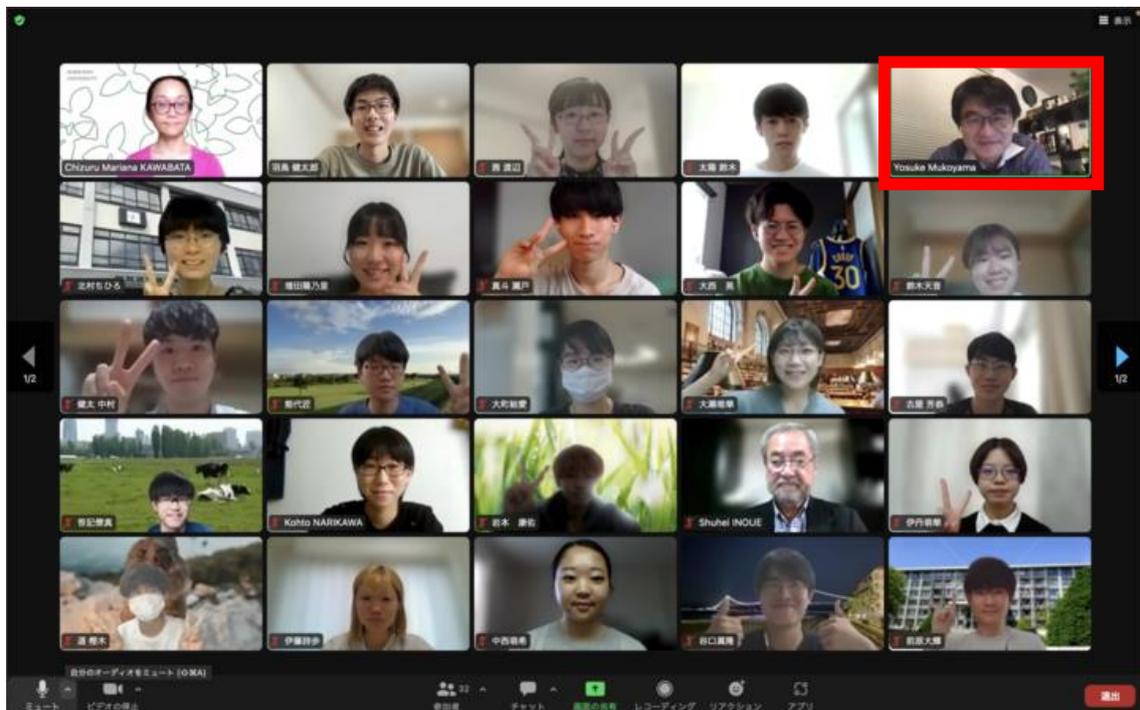
次に「失敗してもめげないこと」です。研究はおよそ 8 割が失敗することが普通であるため、トライアンドエラーを繰り返し、最初は失敗に慣れなくても、めげない精神を養っていくことが重要であるとおっしゃっていました。このお話を伺うまで、失敗は恐怖で、失敗しそうなことには目を背けてしまうことが多々ありました。しかしこのお話を伺った後、研究においてはもちろん、自分にとって未知な領域ではむしろ失敗することが当たり前だという気概を持つようと思いました。

3 つ目は「考えること」です。向山様は、主体的思考の必要性を強調しており、自分が納得のいく選択や決断をする努力の取り組みとして、様々な業界の人との対話やフィールドワークなどの体験を通して、下すべき決断内容や選択肢をより深く多面的に考察できる力

を養うことが重要であるとおっしゃっていました。このお話を伺って、読書や対話を通して主体的思考に必要な情報やいろいろな人の考え方を学んでいきたいと感じました。

そして最後は「たくさんの専門家と話をしたり、共同研究をしたりすること」です。向山様は、研究者のキャリアパスとして大切なことは、臆することなく専門家と対話をしたり共同研究をすることで、自分の研究に大切な知見を得たり、自分が目指すロールモデルを探すこと、とおっしゃっていました。このお話を伺って、大学が主催しているシンポジウムに参加したり、自分が興味のある研究室の教授のお話を聞いてみたいと思いました。

以上の内容を踏まえ、締めめのメッセージとして「日本に留まらずに、グローバルな視点を持ち、外向きの先駆者となって海外に飛び出せ」というお言葉をいただきました。このお言葉は海外への一歩を踏み出そうとする私たちの背中を押してくれました。向山様のおっしゃっていた「外向きの視野」をもって様々な研究分野に携わることや、海外の人々とより多く関わっていく機会を積極的に持つことを意識しようと思いました。（文責：古屋）



【向山様と FSP 生の様子】

※赤枠が向山様

事後学習

振り返りミーティング

事後授業

振り返りミーティング

研修中においてはグループ 5 主導で各研修終了後に必ず全員参加の振り返りミーティングが開かれました。このミーティングの目的は単にそれぞれの研修で得られた成果を再確認することだけではなく、研修で得た学びを次の研修へとつなげることです。毎回のミーティングで FSP 生は 5 つのブレイクアウトルームに分かれ、今回の研修で学んだこと、今回の研修で得られた気づき・前後での考えの変化、今回の研修で困ったこと、今回の研修の反省・次回への抱負の 4 点を中心に振り返りを行いました。

以下に印象的な意見をいくつか載せます。

〈協定大学〉

Vietnam National University

- ・学生交流のときに出されたベトナムについてのクイズに答えるためには事前に自分たちで作成した調査書だけでは足りず、もっと自発的にベトナムについて調べておく必要があった
- ・学生交流では、会話に参加しようとする態度によって話題を広げられるかどうかが決まるので、英語力というよりはコミュニケーション能力など積極性の部分で改善が必要だと思った

IPB University-Institut Pertanian Bogor

- ・講義のとき、先生から学生に質問を投げかけることで、学生側も緊張感をもって授業に臨めたと感じた
- ・ブレイクアウトルームでの学生交流で自分の国について紹介するとき、発言量が偏ることで特定の人にかかる負担が大きくなってしまったため、次回からは事前に役割分担を決めるなどの対応をしていきたいと思う

Curtin University

- ・英語で書かれた事前課題を読み込んで参加すると、思ったよりも授業の中で分かる単語が多かった
- ・自分のグループメンバーと英語で話すのは初めてだったが、英語のできる人に先生への対応や、ファシリテーターを任せしまっていた

University of Zambia

- ・学生交流会でインターネット回線のトラブルのために講師の方の接続が遅れたことによる進行の変化を受けて、文化の違いともいえるが、予定通りに企画が進むとは限らないことに気づいた
- ・協定大学の学生から北海道大学について想定外の質問が多く出たが回答できなかったため、自分は北大のことを全然知らないと感じかされた

〈御講話〉

MUJI Finland 高木美穂 様

- ・今まで続けてきたことをやめて新しいことに挑戦することをしても良いということや、どんな場所でも適応し、自分を押し付けないことの大切さを学んだ
- ・振り返りミーティングで自分の考えがまとまらないまま発表してしまっていたので、次回からはノートやメモに自分の考えをアウトプットしてから発言するようにする

シロアムの園 公文和子 様

- ・障がい者の方々の不便をできるだけ減らして「守る」というより、賜物を磨いて力にして「同じ目線にする」という方向で社会を作ることの大切さを学んだ
- ・それぞれが持ち場で最高のパフォーマンスを発揮する、という考え方は今後のFSPの活動にも活かしていけると思う

国際連合児童基金（UNICEF）渋谷朋子 様

- ・現地で活動する際には、何をやりたいかよりも自分には何ができるのかが大切であり、積極的に行動を起こしていくことが重要であるということ学んだ
- ・「言語は使えば上手くなる、間違いを恐れずとにかく喋る」と渋谷様がおっしゃった通り、色々な言語の勉強をしたいなと思った

米国国立衛生研究所（NIH）向山洋介 様

- ・経験というものは点と点のように独立しているものにとらえがちであるけれども、あとで自分のキャリア形成に意味を持つようになるということを感じた
- ・研究職は自分の研究スキル、研究課題を同僚と共有するなどのコミュニケーションが大事だと学んだ

このように、「何を学べて何が足りなかったのか」「改善するにはどうすればよいか」を考え、同じルームのメンバーと話し合いました。各自が自分の学びを客観視し、得られた学びが次の学びへとつながるような効果的な振り返りを行っていました。

事後授業

事後授業は9月下旬から10月上旬にかけて2回行われました。

第1回事後授業：9月21日（水）

まずグループ5が成果報告の中心となるトピックを発表し、それに対して他グループのFSP生や先生方がフィードバックを行いました。それらのフィードバックは成果報告会でのプレゼンテーションに活かされることになりました。次に、キャリア・デザイン・ワークシートを活用してFSPを通して学んだことやお互いのキャリア・デザインについて共有しました。各グループの垣根を超えて少人数で話し合い、話し合った内容をまとめて発表することで自らのキャリア・デザインを見つめ直す良い機会になりました。

第2回事後授業：10月5日（水）

FSPで学んだことをFSP生や関係者の方々以外にも伝える成果報告会が対面で行われました。初めに4名のFSP生が代表で授業概要の説明をし、その後グループ5がFSPで学んだことについてプレゼンテーションを行いました。この成果報告会では、FSPを知らない方々に向けてFSPの魅力伝えるのはもちろんのこと、FSPの魅力を再認識することで、自らの学びを振り返る良い機会となりました。

終わりに

本報告書を最後までお読みくださりありがとうございます。

コロナ禍の現在、本来海外を訪れて行う研修である FSP は前回に引き続きオンラインでの開催となりました。しかし、オンラインだからこそコストカットができ、世界中で研修ができるなどのメリットは注目すべきことです。第31回 FSP はより多くの人々に、広い視点での海外への可能性を開くものとなりました。

様々な方の御助力があり、私たちは8カ国での研修を無事終えることができました。この実り多い経験を、本報告書をお読みになった皆様と少しでも分かち合えることを祈って締めさせていただきます。

謝辞

この度は私たちにキャリア形成の一步を踏み出す機会を与えてくださりありがとうございました。様々な方の助けを得て、FSP はとても学び多いものとなりました。

お忙しい中ご指導下さり、ときに相談にもものってくださいました川端千鶴先生や井上修平先生をはじめ、親身になってご支援くださった先輩方、企画から運営まで幅広くサポートしてくださいました事務スタッフの木下さん、石倉さん、谷越さん、綿世さん、大変ありがとうございました。この場を借りて重ねてお礼申し上げます。FSP 生一同、この学びを必ず次の機会へ繋げていきます。ぜひ見守っててください。

編集後記

第31回 FSP 研修でグループ3になったとき最初は正直個人作業が多いグループだなと思っていました。グループ1,5のようにプレゼンテーションもグループ2や4のように学習会などのイベント運営もなく、ただ報告書をつくるという作業だけで終わるのかと思っていました。しかし実際には報告書をつくるためには細やかなミーティングが必要でした。当然この全体報告書をつくるうえでも何度もミーティングを重ねまして、先に日程を詰めこんでいた僕にとっては予定の調整など大変な面もありましたがこの作業を通じてグループ3のみんなとの絆を深めることができました。最後にこの報告書はグループ3、そしてチームの皆様や支援員の方々、先生方、事務の方のご支援がなければ完成しえないものでした。この場で改めてご支援に感謝します。ありがとうございました。(福元政文)

FSP での活動が始まる前は海外での研修にのみ着眼をしていましたが、それに至るまでの間に事前学習などでたくさんの学びを得ることができました。特にグループでの活動においてはスケジュール管理や情報共有の大切さをひしひしと感じました。これは FSP 応募時

には予想していなかった学びであり、大変貴重な体験であったと思います。研修中における御講話や学生交流では、自分の将来のキャリアにとって大変勉強になるお話であっただけでなく、自分自身の興味関心ややらなければいけないことを知り、自分の現状を見つめ直すきっかけにもなりました。私はまだまだ未熟な人間ではありますが、今回の FSP が自分の成長起爆剤となったことを確信しております。皆様にとってこの報告書が FSP 参加の動機となり、自分自身の成長の礎となる事を願っております。(鈴木太陽)

FSP 生として授業に参加した数か月間は、事前の説明会を受け抱いていたようなイメージといい意味でとてもかけ離れていたものでした。海外大学とのオンライン研修において英語を使うコミュニケーションのみならず事前・事後学習、グループ活動を通してスケジューリングの大切さや自分の将来のキャリアを意識しながら日々の活動に取り組む大切さを実感できました。授業全体を通してこれまで自分が体験してきた学習環境では実現しなかったようなとても充実したものであり、受動的でない能動的な「答えのない学び」がどのように大学生活において進んでいくのかをつかむことが出来ました。これから FSP に取り組んでいく皆様においても当授業でまさに大学生活の「ファースト・ステップ」を手に入れることを願っております。(伊原快)

この第 31 回 FSP には「自分の将来について何かヒントが得られるといいな」というような軽い気持ちで参加しました。しかし実際は、今までの学校の授業では実践していなかった、一回の授業から多くのことを学ぶための事前準備や、授業での学びを言語化し相手に伝えるといったことを行いました。他にもメンバーと自分からコミュニケーションをとらなければならない場面が多くありました。私はこれらの過程で自分の長所と短所を再発見することができました。実際のオンライン研修はあっという間でしたが、自分の将来を考える上での新しい視点や考え方など多くのことに気づかされました。全体を通して失敗や気が進まないことがたくさんありましたが、互いに支えあうメンバーの存在が心強かったです。FSP でのあらゆる出会いに感謝したいと思います。ありがとうございました。(渡辺茜)

FSP 最大の魅力は共に研修に臨む受講生との出会いでした。そもそも私がこの研修に参加したのは「人間的な成長」という漠然とした理由のためでした。自分のキャリアを定める目的は無く海外志向もあまり強くないので、初めはチームメンバーたちと同じ視点で協力して課題に取り組めるか少し不安でした。しかし、すぐに杞憂だとわかりました。生き方や進路、見えているものがチームメンバーと違っても彼らから学べることはたくさんあったからです。例えば、英語の能力や海外経験が自分よりはるかに高く豊かな人たちがいました。自分では考えもしないほどこまめにミーティングを開いてメンバーとコミュニケーションをとり、「必要なこと」を広く把握し「すべきこと」をいくつも提案してくれる人もいました。もちろん約 2 週間の研修自体も貴重な経験でしたが、何よりも自分と全く異なる生き方の存在を強く実感し、このような仲間たちと生の言葉を交わしてチームワークを築いてい

くことが、新しい挑戦へのモチベーションとなり、自分の中に眠る「可能性」を刺激するものとなりました。この機会をくださった全ての方々に感謝します。 (百々瀬あかり)

最初は海外の授業を受けられるのが面白そうだと思い FSP に参加しました。しかし、いざ授業が始まると海外研修の前後に多大な準備や作業がありました。個人個人でなくチームやグループのメンバーと協力して作業を進めていく上で、多くのコミュニケーションが必要になります。自分はもともと他の人と共に作業をするのが苦手でしたが、何度もグループでミーティングを重ねるうちに少しずつ自分の意見を伝えられるようになり、成長のきっかけになったと思います。海外の授業や御講話からももちろんたくさんの学びを得られましたが、自分にとってはこのグループ活動における学びが特に大きかったです。FSP に参加するという選択をして本当に良かったです。必ず貴重な経験を得られますので、FSP の受講を検討されている方はぜひ思い切って一歩踏み出してみてください。 (倉島直也)



HOKKAIDO
UNIVERSITY

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン1
第31回 FSP オンライン 全体報告書：2022年10月3日

編集

第31FSP オンライン グループ3 全体報告書編集担当
伊原 快 倉島 直也 鈴木 太陽 福元 政文 百々瀬 あかり 渡辺 茜

お問い合わせ先

北海道大学 学務部国際交流課

TEL：(011)706-8040

Email：ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website：http://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/